

転生したデュエリスト

YASUT

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——例えば、その少年に前世があったとして。何かのきっかけに全てを思い出したら、どうなるだろう。

少年「小波（コナミ）ユウ」は困惑した。



自分なりに「転生モノ」を書いてみた。長く続ける気はないので、デュエルを含めて五話以内に終わらせる予定。

時間軸は舞網チャンピオン・シップ開催前。平和な時期がここしかないぞ、一体どういふことだ!?

目次

転生したデュエリスト	1
可能性の黒竜	11
転生者の覚醒	32

転生したデュエリスト

例えばもし、その少年に前世があつたとして。何かのきつかけに全てを思い出してしまったら、どうなるだろう。

前世の記憶があるということは、こうして生きている現在イマは二度目の人生ということになる。二度目ならば当然、持っている知識・経験も、年代と比べれば差がつく。

享年が八十なら八十年。六十なら六十年。前世で長生きしていればしているだけ、知識のアドバンテージを得ることができる。

少年の享年は十八だった。デュエル養成校を卒業し、プロの世界へと足を踏み出そうとしていた頃に亡くなった……らしい。

というのも、その瞬間の出来事だけ思い出せないのだ。空白が残った絵のように、あるいはピースが足りないパズルのように、その部分だけが綺麗さっぱり抜け落ちていく。おそらく、不幸な事故にでも遭って頭を強く打つたのだろう。事故の影響で記憶喪失。にわかには信じられないが、有り得ないことではない。

ともかく少年は十八で亡くなった。言い換えればこれは、年代の親友よりも十八年の知識・経験があるということだ。

それだけあればやりたい放題だ。比喩ではない。流石に身体能力はどうしようもないが、それ以外の場面では一騎当千と言ってもいい。……だが。それはあくまで“能力”に限った話だ。



「今日皆に集まってもらったのは他でもない。ボクの……いや、俺の話聞いて欲しかったんだ」

少年——小波ユウはトレードマークの帽子を脱いでそう言った。

ここ、遊勝塾に集められたのは四人。

わけあって塾長を務めている柊修造。

その娘、柊柚子。

このこの塾生であり榊遊勝の息子、榊遊矢。

そして、紫雲院素良。

小波の態度の変化に、四人は怪訝な顔をした。彼は榊遊矢、柊柚子に続く遊勝塾の最古参メンバーである。一人称は“ボク”で性格も消極的だったが、デュエルの腕は昔から恐ろしく強かった。

だが今はどうだ。消極的な一面は影を潜め、一人称も「俺」に変わっている。演技かとも疑ったが、おそらく違うだろう。

四人を代表し、遊矢は小波に尋ねる。

「どうしたんだよコナミ、急に態度なんか変えて。何かあつたのか？」

「ああ、あつたよ。あつたとも。だから皆に相談したくて、こうして集まってもらつたんだ」

「タツヤとフトシとアユには言えないことなのか？」

「そうでもないけど……話がややこしくなりそうだったからな。今回は席を外してもらつた。

……じゃあ、本題に入るぞ」

コナミは深呼吸した後、四人の顔を一人一人見回した。

典型的な「？」の顔。これがどう変わってしまったのか、コナミは怖かった。だが、ここまできて後には引けない。追い込んだのは他ならぬ彼自身なのだ。

コナミは覚悟を決め、自分の秘密を告白した。

「俺には前世の記憶があると言ったら、皆は信じるか？」

「……はあ？ どういうことだ？」

その突拍子の無さに、修造が思わず眩いた。

他三人は前世と言われてもピンと来ないのか、特に変化はない。

「前世っていうのは……つまり、コナミ君。君は以前この世界のどこかで生きて、亡くなった後に転生したということか？」

「この世界ではないですけど、大体そんな感じですよ」

「な……なるほど？」

修造は納得したようなしていかないような、何とも言えない表情をしていた。

無理もない。急にそんなことを言われても信じられるはずがない。なにせ内容が内容なのだ。馴染み深い三人だからこそ会話が成立しているのであって、他人に言ってもただの電波小僧としか思われまいだろう。

「うーん、それって本当なのかなー？」

「おい、素良……」

「えー、だってさー」

素良は新しい飴を取り出し、遊矢の静止を聞かずコナミに問いかける。

「だって、いきなりそんなこと暴露されても信じられないよ。誰だろうとコナミはコナミでしょ？」

「いや、違うな。確かにボクはコナミだけど、俺はコナミじゃない」

「? どういうこと？」

「要するに、コナミは半分消えたってことだよ。俺の復活と引き換えにな。

昨日までの俺は確かにコナミだった。遊矢、柚子、そして塾長。三人と一緒にこの塾で育った、ありふれた十四歳の男の子。

でも今は違う。俺は思い出した。思い出してしまった。前世の自分、プロになるまであと一歩だった俺自身のことを」

「うーん……つまり、前世と現世の自分が融合しちゃって、その体には二つの意思が宿ってるってこと？」

「だったら相談なんてしないよ。それって要は、友達が一人増えるってことだからな」

「はつきりしないなあ。早く結論を教えてよ。コナミは一体どうしちやったの？」で、今ここにいる君は誰なの？」

「そうだな……じゃあ、色に例えようか。前世の俺を黒、現世のボクを白とする。

さつき素良が言ったのはつまり、一つの体に白と黒が同居してるってことだ。これらは独立して意思を持ち、明確に区切られている。平たく言えば二重人格。かの伝説の決闘者がこれだったわけだ。デュエリスト

で、今の俺はグレー。区切りがなく、二つの意思は後戻りできない段階にまで混ざり合ってしまった。ここにいる自分は確かにコナミだけど、既に「俺」でも「ボク」でもない」

「なるほど、ね」

コナミの説明を一頻り聞き終え、素良は納得した。

紫雲院素良は融合召喚の使い手。この手のオカルトはすぐ理解できる。

「要するに君、合成獣^{キメラ}なんだね」

「っ！ 素良、貴方——！」

「柚子！」

怒りのあまり手を挙げようとした柚子を、遊矢が止めに入った。力は遊矢の方が上らしく、柚子はその手を振り払えない。

「遊矢、どうして！」

「駄目だ、柚子」

「だって素良、今コナミに酷いこと——」

「柚子」

「っ……」

有無を言わせぬ眼力に柚子は怯む。

遊矢は目力だけで、喚く柚子を静止させたのだ。

「……」^{ごめん}素良、コナミ。ちよつと席を外すよ。行くぞ柚子」

遊矢はそのまま柚子の手を引いて、二人一緒に部屋を出て行った。

「あらら……怒らせちゃったかな」

「いや、今のは怒って当たり前だと思っぞ」

「げ、塾長まで？」

「ああ。冗談でも言っていていいことと悪いことがある」

「だから、冗談じゃないんだってば。ねえ、コナミ」

「……そうだな」

力無げにコナミは肯定する。

そう、合成獣^{キメラ}。少なくとも、彼自身はそう考えている。

「まあ、だから相談したんだけどな。俺は一体、これからどうするべきなのかなって」

「どう、とはどういうことだ？」

「前世の自分として第二の人生を生きるべきか、それとも今まで通り『小波ユウ』とし

て生きるべきか」

「……君は小波ユウだ。なら、答えは決まってるだろう。これまで通り柚子達と——」

「つまり、俺に消えろってことか」

コナミは初めて怒気を孕んだ声で抗議した。

困惑しつつも、修造は別の案を提案する。

「……だったら、前世の君として生きたらどうなんだ」

「つまり、ボクに消えろってことですね」

「……新しい人生を歩め、と言ったら？」

「俺とボク、両方を否定することになるな」

「……はあ」

当然と言わんばかりの否定に、修造は深く溜息をついた。

「やっぱりそう来たか。相変わらず凄い潔癖症だな、君は」

「すいません。でもわかってくください。色々なことが突然浮かんできて混乱してるんです。」

俺にだって家族がいた。でも、ボクにだって家族がいる。どちらが本当の親で、どちらが偽物の親なのか……いえ、正確にはどちらも本物なんです。どちらも俺を育ててくれた、凄い人達なんです。でも納得できないんですよ。唯一無二が二人に増えてしまったわけですから。

家族だけじゃありません。友人だって相棒カイドだって。何もかもが二倍に増えてしまつて、処理できなくなってるんです」

修造はその悩みを理解できない。転生者なんて言われてもピンと来ないのが普通の反応だろう。

けれど、解決する方法は知っている。転生者といえど所詮は十四の小童。前世の年齢

を加算しても三十二。修造にとっては、それでもやはり小童なのだ。

……そんな悩みを他所に、素良は無邪気にコナミに話しかけた。

「じゃあさコナミ。いきなりだけど、ボクとデュエルしてくれない？」

「デュエル？」

「うん。正直、転生者とか言われても全然信じられないし、ピンと来ないんだよね。でもコナミって、前世ではプロを目指してたんでしょ？　で、少なくとも昨日までの君よりは強かった」

「ああ、それは確実だ。デュエルの腕に関しては、前世の方が断然強い」

「なら、今の君は昨日までとは比べ物にならないくらい強いつてことだね？　じゃあ、

僕とのデュエルで証明してみせてよ。ねえ塾長、いいでしょ？」

「うーん……そうだな。なんだかんだ言いつつ、結局それが一番か。よし、ついてこい二人共！」

修造はデュエルの準備をするべく、リングの方へと向かった。素良は半分スキップしながら修造を追う。

「……デュエル、か」

コナミは自分のデッキから二枚のカードを取り出した。

雷を操る悪魔族、《デーモンの召喚》。

可能性の龍、《レッドアイズ・ブラック・ドラゴン真紅眼の黒竜》。

「皮肉なものだな。前世で欲しかったカードが現世に、現世で欲しかったカードが前世にあったなんて。でも、ちょうど良かったよ素良」

コナミは、修造を追う素良を見て――

「肩慣らしに相手してやる」

―― “これ以上ないほどの上から目線” で、そう呟いた。

可能性の黒竜

デュエルの準備を終えた頃、遊矢は柚子を連れて戻ってきた。

素良、コナミは既にデュエル場にて待機中。いつでも始められる状態だ。

「ごめん塾長、勝手に席を外して。それより、どうして二人がデュエル場に？」

「確かめたいんだそうさ。コナミ君が本当に転生した人間かどうか」

「じゃあ素良は、なんだかんだ言ってるのか？ キメラとか言っちゃったのに」

「素良自身は単にデュエルがしたいだけだと思うけどな。だが、これではつきりするだろう。今の小波ユウは一体どうい^{デュエリスト}う決闘者なのか。前世と現世、色濃く出ているのはどちらなのか、が」

修造は険しい目つきでコナミを観察する。

遠目に見ただけでも分かるだろう。立ち振る舞いや纏う気配。今のコナミは、昨日までの小波ユウとはまるで違う。

「どちらかって……コナミはコナミでしょう？」

「いいや、柚子。今のあいつはコナミであってコナミじゃない。俺達とは違う高次元の

存在、転生者になったんだ。

そして、だからこそ迷っている。前世に遺してきた者達と、*“小波ユウ”*として築いてきた現在。そのどちらかを切り捨てなきゃいけないと」

「切り捨てるって、どうしてそんなことしなきゃいけないのよ」

「両立できないから、だろうな。いつそあいつがデュエルの神様だったら、迷わずに済んだかも知れないけどな」

修造は立ち上がり、デュエル場の二人に聞こえるよう声を張り上げた。

「そろそろ始めるぞー！ 準備はいいか二人共ー！」

「いいよー！」

元気よく答える素良と、控えめに頷くコナミ。前世の記憶がフィールドバックされた影響か、どこかぎこちない。

「では行くぞー！ アクシオン・フィールドオン！ 《スウィーツ・アイランド》！」

修造がマシンを起動すると、専用のフィールド魔法が展開された。

《スウィーツ・アイランド》は名前の通りお菓子の国。巨大な飴玉やチョコレート、ケーキにプリンが出現する。

「わあ、お菓子の国！ 前に遊矢とデュエルしたフィールドだね！ それじゃあ、準備はいい？」

「ああ、大丈夫だ」

「ようし、行つくよー！　せーの、戦いの殿堂に集いし決闘者達デュエリストが！」

「う……」

アクション・デュエル特有の口上に抵抗を覚え、コナミは吃る。

だが言わなければ始まらない。コナミは控えめかつ興味なさげに、続きの口上を綴った。

「……モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い」

「フィールド内を駆け巡る！　見よ、これでデュエルの最強進化系！　アクション」

「」

「デュエル！」



コナミ

LP：4000

素良

LP：4000

「俺の先行。手札から《伝説の黒石》を召喚」

ブラック・オブ・レジェンド
《伝説の黒石》

星1／闇属性／ドラゴン族／攻 0／守 0

「そして効果発動。このカードをリリースすることで、デッキからレベル7以下の《レッドアイズ》モンスターを特殊召喚する。

俺が喚び出すのは、《真紅眼の黒竜》！」

レッドアイズ・ブラックドラゴン
《真紅眼の黒竜》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

卵が割れ、紅い輝きと共に黒龍が誕生した。紅い瞳と漆黒の肉体。シンプルな外見だからこそ、そのインパクトは他のモンスターを凌駕する。

コナミにとっては現世の象徴。切り札として長く愛用してきた一枚だ。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「コナミお得意のレッドアイズだね。なんだ、いつもと変わらないじゃん。僕のターン！」

素良はドローしたカードを確認し、ニヤリと笑う。

「魔法カード、《融合》を発動！ 僕が融合するのは、手札の《エッジインプ・シザー》と

《フアーニマル・ベア》！」

悪魔の爪よ！ 野獣の牙よ！ 神秘の渦で一つとなりて、新たな力と姿を見せよ！

融合召喚！ 現れ出ちやえ、すべてを切り裂く戦慄のケダモノ、《デストーイ・シザー・ベアー》！

《デストーイ・シザー・ベアー》

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2200 / 守1800

ぬいぐるみの各部位が裂かれ、身体の骨組みが缺で再構成された。融合召喚されたそのモンスターには可愛さと怖さが同居しており、独特な雰囲気を漂わせている。

「だが、攻撃力は2200だ。俺のレッドアイズは倒せないぞ」

「慌てない慌てない。忘れたの？ これは普通のデュエルじゃなくてアクション・デュエルなんだよ？ だったら——やっぱり、これを使わないとね」

素良は足元に落ちていたカードを拾い、自慢げに見せつけた。

裏面には大きくAの文字。 アクション A カードと呼ばれる、アクション・デュエルにのみ使用できる専用の魔法カードだ。

「A 魔法、《キャンディ・パワー》発動！ モンスター一体の攻撃力をターン終了時まで400ポイントアップさせる！ 当然僕は、《デストーイ・シザー・ベアー》を選択！」

《デストーイ・シザー・ベアー》

攻2200 ↓ 攻2600

「攻撃力2600か」

「お菓子の力は凄いなだ！」

ようし、このままバトル！ 《《デストロイ・シザー・ベアー》》で、レッドアイズ・ブラックドラゴン《《真紅眼の黒竜》》を攻撃！」

コナミ

LP：4000 ↓ LP：3800

ぬいぐるみのパンチを受け、レッドアイズ・ブラックドラゴン《《真紅眼の黒竜》》はお菓子の池に叩き落とされた。

それだけではない。レッドアイズは《《デストロイ・シザー・ベアー》》に捕縛され、鋏で裂かれた腹部に吸収されていく。

「《《デストロイ・シザー・ベアー》》のモンスター効果、発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊し墓地に送った時、そのモンスターを攻撃力1000ポイントアップの装備カードとして、このモンスターに装備する！」

《《デストロイ・シザー・ベアー》》

攻2600 ↓ 攻3600

「さあ、これでレッドアイズは封じたよ。コナミは一体どうするのかな？」

「どうしようかな。まあ、退屈はさせないさ」

「余裕だね」

「余裕だからな」

「……ふうん。だったらいいけど。僕はカードを一枚を伏せて、ターンエンドだ」

「待った。ターン終了前に、この罠トラップカードを発動させてもらおう。

永続罠 《リビンググデッドの呼び声》。墓地からモンスターを一体、攻撃表示で特殊召喚する。これにより、《伝説の黒石》を特殊召喚」

《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンド

星1／闇属性／ドラゴン族／攻 0／守 0

「またそのカード？ 君のデッキには《デストーイ・シザー・ベアー》を倒せる《レッド

アイズ》はもういなかったと思うけど？」

「ああそうさ。ただし、昨日まではな」

「じゃあ見せてもらおっかな。君の本当の力ってやつをさ。僕はこれでターンエンド」

《デストーイ・シザー・ベアー》

攻3600 ↓ 攻3200

素良のターンが終了すると同時に、両者の目つきが少しだけ変わった。全員が確信する。このデュエルは、ここからが本当の戦いなのだ。

「俺のターン！ ここで、《伝説の黒石》の効果発動！ このカードをリリースし、デッキからレベル7以下の《レッドアイズ》モンスターを特殊召喚する！

現れる、レベル6！ 《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》！
レッドアイズ・ライトニング・ロード

《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》

星6／闇属性／悪魔族／攻2500／守1200

コナミのフィールドに、雷光を司る上級悪魔が降臨した。瞳は血のように紅く、何より禍々しい。

「更に装備魔法《スーパーヴィス》をエビル・デーモンに装備！ このカードを装備されたデュエルモンスターは、再度召喚された状態になる。

そして、エビル・デーモンのデュアル効果発動！ 一ターンに一度、このカードの攻撃力より低い守備力を持つ相手モンスターを、全て破壊する！

「やるね、でも残念！ 伏せカードオープン！ 速攻魔法《サイクロン》！ フィールドの魔法・罠カードを一枚破壊する！」
マジック トラップ

「ならこちららも、手札から速攻魔法《サイクロン》発動！」

「ええっ!？」

互いの場に全く同じカードが現れ、竜巻を発生させた。コナミの《サイクロン》は
レッドアイズ・ブラックドラゴン
 《真紅眼の黒竜》を、素良の《サイクロン》は《スーパーヴィス》を破壊する。

「装備カードがなくなつたことで、《デストーイ・シザー・ベアー》の攻撃力は元に戻る」

《デストーイ・シザー・ベアー》

攻3200 ↓ 攻2200

「そして、《スーペルヴィス》第二の効果。表側表示のこのカードがフィールドから墓地に送られた時、自分の墓地から通常モンスターを一体特殊召喚する。

俺が特殊召喚するのは、今《サイクロン》で破壊した《真紅眼の黒竜》！」

《真紅眼の黒竜》

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

コナミの場に二体の真紅眼レッドアイズが並び、共鳴し合った。前世と現世、相反する二つの象徴。コナミにとって片方は初めて見るモンスターだが、同時に相棒でもある。

「《レッドアイズ》が二体並んだ！」

「あいつ、本当に強くなってぞ。」

観戦していた修造達は、上級モンスターを並べたその戦術に驚嘆した。

エビル・デーモンは《スーペルヴィス》の効果によって再度召喚された状態になっていた。逆に言えば、《サイクロン》などで《スーペルヴィス》が破壊されてしまえば、エビル・デーモンの効果は不発に終わってしまう。

しかしコナミはそれを逆手にとり、《サイクロン》で装備カードとなっていたレッドアイズ・ブラックドラゴン《真紅眼の黒竜》を破壊した。《デストーイ・シザー・ベア》の攻撃力は元に戻り、《スーペルヴィス》二つ目の効果でレッドアイズを蘇生。敵モンスターの弱体化と上級

モンスター召喚を一度にやっつてのけたのだ。

「バトル！　まずはエビル・デーモンで《デストーイ・シザー・ベアー》を攻撃！
イトニング・ストライク！！」

悪魔の雷撃が《デストーイ・シザー・ベアー》の全身を貫き、粉碎した。
ライフが減り、素良のフィールドからモンスターが消える。

素良

LP：4000 ↓ LP：3700

「くっ……！」

「続いてレッドアイズ、素良にダイレクトアタック！　『黒炎弾』！」

間髪入れず黒龍の口から大玉の火炎が放たれる。

素良に回避する術はなく、火球は火柱となって燃え盛った。

「うわああ——！！」

素良

LP：3700 ↓ LP：1300

年相応の少年の絶叫が響き渡る。

削られたライフは合計で2700。決して無視できる数値ではない。

「っ……ちよつと、油断しすぎたかな」

「その代償が2700だ。お前の悪い癖だな」

「あつはは、ごめんねコナミ。正直言つて舐めてたよ、君のこと。でも安心して。」

——ここからは、本気でやるから」

「なら期待させてもらおう。カードを一枚伏せて、ターンエンド」

目つきが一層険しくなる。余裕がなくなってきた証拠だろう。

素良は新しい飴玉をくわえ、^{ターン}逆襲を開始する。

「僕のターン！ ^{マジック}魔法カード《融合回収》を發動！ この効果で墓地から《融合》、そ

して融合素材に使つた《ファーニマル・ベア》を手札に戻す！

そして、墓地の《エツジインプ・シザー》の効果發動！ 手札を一枚デッキの一番上

に戻し、このカードを特殊召喚する！」

《エツジインプ・シザー》

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守 800

「永続魔法《トイポット》発動！ ターンに一度、手札を一枚捨ててドローし、そのカードを確認する。それが《ファーニマル》モンスターだった場合、手札からモンスターを一体特殊召喚できる」

「なるほど。つまり、今のデッキトップは《ファーニマル》か」

「そういうこと！ ドロー！」

素良はカードをドロローし、互いに確認する。

「引いたのはさつき手札に戻した《フアーニマル・ベア》。《トイポット》の効果により、攻撃表示で特殊召喚！」

《フアーニマル・ベア》

星3 / 地属性 / 天使族 / 攻1200 / 守 800

「更に僕は、《フアーニマル・マウス》を通常召喚！」

《フアーニマル・マウス》

星1 / 地属性 / 天使族 / 攻 1000 / 守 100

「《フアーニマル・マウス》の効果により、デッキから新たに二体《フアーニマル・マウス》を特殊召喚する！」

《フアーニマル・マウス》×2

星1 / 地属性 / 天使族 / 攻 1000 / 守 100

「……参ったな、これは」

加速度的に増えていくぬいぐるみ達に、コナミは溜息をついた。

素良のフィールドには《フアーニマル・ベア》、《エツジインプ・シザー》、そして《フアーニマル・マウス》が三体。更にこの次にはまだ《融合》がある。

「さあ行くよ！ お楽しみはこれからだ！」

魔法カード、《融合》を發動！ 僕はフィールドの《エッジインプ・シザー》と《ファーニマル・マウス》を融合！

悪魔の爪よ！ 鋭い牙よ！ 神秘の渦で一つとなりて、新たな力と姿を見せよ！

融合召喚！ 現れ出ちやえ、すべてを引き裂く密林の魔獣！ 《デストロイ・シザー・タイガー》！

《デストロイ・シザー・タイガー》

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1900 / 守1200

二体のモンスターが一つとなり、巨大な虎のぬいぐるみが召喚された。

《デストロイ・シザー・ベア》同様腹部は裂かれており、融合前のぬいぐるみとは打って変わった凶暴さが見え隠れしている。

「《デストロイ・シザー・タイガー》の効果。このモンスターの融合召喚に成功した時、素材になったモンスターの数までフィールドのカードを破壊できる！ 君のレッドアイズ達は破壊させてもらうよ！」

巨大な鋏が刃を向き、コナミのレッドアイズ二体を一閃した。

上級モンスターは一瞬にして全滅し、今度はコナミのフィールドが空きとなる。

「これで厄介なモンスターは消えたね。《デストロイ・シザー・タイガー》の攻撃力は、自分の《ファーニマル》または《デストロイ》一体につき300アップする。僕のフィー

ルドにはシザー・タイガーも含めて四体。よって、攻撃力は1200アップする」

《《デストーイ・シザー・タイガー》》

攻1900 ↓ 攻3100

「そういえば君、さつきからAカードを一枚も使つてないね。レッドアイズが破壊される前に探していれば、もしかしたらまだ負けなかったかもしれないのに」

「それはどうかな。俺は手札から、《真紅眼の遡刻竜》の効果発動！ レベル7以下の《レッドアイズ》が破壊され墓地に送られた時、このモンスターを守備表示で特殊召喚できてる！」

《《真紅眼の遡刻竜》》

星4／闇属性／ドラゴン族／攻1700／守1600

「そして、破壊された《レッドアイズ》達を可能な限り、破壊された時と同じ表示形式で特殊召喚する！」

さあ甦れ！ 我が下僕の《《レッドアイズ》》達よ！

《《真紅眼の黒竜》》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

《《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》》

星6／闇属性／悪魔族／攻2500／守1200

時が遡り、切り裂かれた二体が再び出現した。

《真紅眼の遡刻竜》の効果により、二体は攻撃表示。《アストロイ・シザー・タイガー》

に攻撃されれば破壊され、コナミのライフは確実に削れるだろう。

「へえ、思ったよりやるね。でも、僕のターンはまだ終わっちゃいないよ。」

墓地から《ファイニマル・ウイング》の効果を発動！ 墓地のこのカードと他の

《ファイニマル》モンスターを除外し、《トイポット》を墓地に送ることで合計二枚ドロースする！

更に《トイポット》の効果！ このカードが墓地に送られた時、デッキから《エッジインプ・シザー》か《ファイニマル》モンスターを一体手札に加える！

《トイポット》、《ファイニマル・ウイング》のコンボで、素良は合計三枚のカードを手札に加えた。

……ここまでして何も来ないはずがない。そう考えたコナミは、アクション A カードを求めて走り出した。

「《ファイニマル・ベア》の効果発動！ このカードをリリースして、墓地から《融合》を手札に加える！」

「っ、また《融合》か！」

「勿論！ 僕はもう一度《融合》を発動！ 手札に加えた二体目の《エッジインプ・シ

ザー》、そして《ファーニマル・マウス》二体を融合！

悪魔の爪よ！ 鋭い牙よ！ 神秘の渦で1つとなりて、新たな力と姿を見せよ！

融合召喚！ 現れ出ちやえ、《デストロイ・シザー・ウルフ》！

《デストロイ・シザー・ウルフ》

星6／閥属性／悪魔族／攻2000／守1500

「まだまだ続くよ！ 魔法カード《縫合蘇生》発動！ 墓地から《ファーニマル》または

《デストロイ》を一体、効果を無効にして特殊召喚する！ 来い、《デストロイ・シザー・

ベアー》！」

《デストロイ・シザー・ベアー》

星6／閥属性／悪魔族／攻2200／守1800

「装備魔法《フュージョン・ウエポン》をシザー・ウルフに装備！ レベル6以下の融合

モンスターに装備することで、攻撃力と守備力を1500アップさせる！

そしてシザー・タイガーの効果で、《デストロイ》達の攻撃力は一体につき900アツ

プする！」

《デストロイ・シザー・ウルフ》

攻2000 ↓ 攻3500 ↓ 攻4400

守1500 ↓ 攻3000

《《デストーイ・シザー・タイガー》》

攻3100 ↓ 攻2800

《《デストーイ・シザーベア》》

攻2200 ↓ 攻3100

「さあ、お待ちかねのバトルだよ！ 《《デストーイ・シザー・ウルフ》》で、エビル・デーモンを攻撃！」

悪魔の牙がエビル・デーモンを食いちぎり、粉碎する。

その余波に紛れ、コナミはA アクションカードを拾った。

コナミ

LP:3800 ↓ LP:1900

「《《デストーイ・シザー・ウルフ》》は、素材になったモンスターの数だけ攻撃できる！」

今度は《《真紅眼の黒竜》》を攻撃だ！」

「A アクションマジック魔法《《キャンディ・ミラージュ》》！

攻撃力2000以上のモンスターを一体りーすし、攻撃を二回まで無効にする！」

《《真紅眼の黒竜》》の幻影が身代わりとなり、残り二回の攻撃を全て防いだ。しかし形勢は変わっていない。素良はこれをチャンスと見て、一斉に攻撃を仕掛ける。

「まだまだ終わらないよ！ シザー・タイガーで《《真紅眼の遡刻竜》》を攻撃！」

《《真紅眼の遡刻竜》》を攻撃！」

「伏せカードオープン！ 永続罠トラップ《真紅眼の鎧旋》！ 自分の場に《レッドアイズ》が

存在する時、墓地から通常モンスターを一体復活させる！ 甦れ、《真紅眼の黒竜》！

《真紅眼の黒竜》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

「だったらなにさ！ バトル続行だ！ シザー・タイガーで《真紅眼の遡刻竜》、シザー・

ペアーで《真紅眼の黒竜》を攻撃！」

「つ——！」

《デストーイ》達の総攻撃を受け、コナミのモンスターは全滅した。

怒涛の連続召喚からの連続攻撃。その威力は、アクションA カードを交えて何とか凌げるほ

ど。紫雲院素良の實力は紛れもなく本物だ。

……だが同時にそれは、化けの皮が剥がれつつあることを意味していた。

「あつはは、凄いなコナミは。今の攻撃を全部耐え切るなんてさ。でも、そろそろ終わりだね。ここから逆転なんてどう足掻いても無理だよ」

「どうかな。最後まで何が起こるか分からない。それがデュエルだろう？」

「ふーん……以前と違って随分強気だね。まあ、それでもいいよ。僕はこれでターンエ

ンド」

「俺のターン、ドロー。」

——《マジック・プランター》を発動。表側表示の永続^{トランプ}罫を一枚墓地に送ることで、デッキから二枚ドロローする」

取り残されていた永続^{トランプ}罫、《リビングゲッドの呼び声》が消滅した。コナミは更に二枚ドロローし——それらを確認した後、ニヤリと笑った。

「素良。今から見せてやる。お前にとつての敵の姿をな」

「え……?」

唐突な告白に、素良は言葉を失った。

敵。その意味を問うより早く、コナミはデュエルを続行する。

「マジック
魔法カード《死者蘇生》! 墓地から、^{ブラック・オブ・レジェンド}《伝説の黒石》を特殊召喚!」

《伝説の黒石》

星1／闇属性／ドラゴン族／攻 0 / 守 0

「このモンスターをリリースすることで、デッキからレベル7以下の《レッドアイズ》を特殊召喚できる!

現れる、^{レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン}《真紅眼の黒炎竜》!」

《真紅眼の黒炎竜》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400 / 守2000

「更に永続^{トランプ}罫 《真紅眼の鎧旋》の効果! 自分の場に《レッドアイズ》がいる時、一

ターンに一度、墓地から通常モンスターを一体特殊召喚できる！

もう一度甦れ！ レッドアイズ・ブラックドラゴン 《真紅眼の黒竜》！」

レッドアイズ・ブラックドラゴン 《真紅眼の黒竜》

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

二体の黒龍が首を並べる。

方や漆黒の竜。方や炎を纏った黒竜。その風格たるや、並の竜の比ではない。

「——まさか」

素良はコナミの次の手を見切り、身構えた。

同レベルのモンスターが二体。即ちエクシーズ召喚。ここまでなら誰でも分かるだ

ろう。

だが、コナミの正体となると話は別だ。〃エクシーズ召喚〃と〃敵〃。これらの単語

から、素良が思い当たる節は一つしかない。

「俺はレベル7の レッドアイズ・ブラックドラゴン 《真紅眼の黒竜》と、 レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン 《真紅眼の黒炎竜》で、オーバーレイ！」

コナミの足元に渦が現れ、黒龍達は吸い込まれる。

圧倒的なエネルギーを間近にして、素良は息を呑んだ。

「鋼鉄の四肢持つ龍よ。転生の炎をその身に宿し、新たな力をここに示せ！

エクシーズ召喚！ 現れる、ランク7！ レッドアイズ・フレアメタル・ドラゴン 《真紅眼の鋼炎竜》！」

《レッドアイズ・フレアメタル・ドラゴン
真紅眼の鋼炎竜》

ランク7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2400
鋼鉄の身体。荒ぶる火炎。

紅き眼を持つ可能性の黒竜、その一端がここに顕現した。

転生者の覚醒

「鋼鉄の四肢持つ龍よ。転生の炎をその身に宿し、新たな力をここに示せ！」

エクシーズ召喚！ 現れる、ランク7！ 《真紅眼の鋼炎竜》！

《真紅眼の鋼炎竜》《レッドアイズ・フレアメタル・ドラゴン》

ランク7／閻属性／ドラゴン族／攻2800／守2400

鋼鉄の身体。荒ぶる火炎。

紅き眼を持つ可能性の黒竜、その一端がここに顕現した。

その咆哮は大気を震わし、敵対者に重圧を掛け続ける。

「レッドアイズ二体のエクシーズ召喚。いつの間にそんな技を……」

「ああ。だが、これではつきりしたな。この力は間違いなく、コナミ君の前世の影響だろう」

突然のエクシーズ召喚に、観客の三人は驚きの色を見せる。前世に目覚めるまでのコナミは一度もエクシーズ召喚を行つたことがない。これで何よりの証明となった。

「……ふーん」

しかしここに、面白くない顔をする者が一人。素良は新しく飴玉を取り出し、竜を見

据える。

「驚いたよ。まさか君が本物のエクシース使いだったなんて。でも相手が悪かったね。それじゃあ僕は倒せないよ」

「……早とちりはよくないな。まだ俺のターンは終わっていない。」

《真紅眼の鋼炎竜》レッドアイズ・フレアメタル・ドラゴンの効果発動！一ターンに一度、オーバーレイ・ユニットを一
つ使い、墓地から《レッドアイズ》通常モンスターを特殊召喚できる！

俺が選択するのは《真紅眼の凶雷皇—エビル・デーモン》！このモンスターを守
備表示で特殊召喚！

《真紅眼の凶雷皇—エビル・デーモン》レッドアイズ・ライトニング・ロード

星6／闇属性／悪魔族／攻2500／守1200

「さらに、このターンの通常召喚権を使い、エビル・デーモンを再度召喚する！」

コナミはカードをディスクから離した後、もう一度同じように配置した。

瞬間、召喚による衝撃波がエビル・デーモンの全身を奔る。再度召喚されたことで、
デュアルモンスターであるエビル・デーモンはようやく真の力を発揮できる。

「エビル・デーモンのデュアル効果発動！一ターンに一度、このモンスターの攻撃力よ
り低い守備力を持つ相手モンスターを、全て破壊する！」

「させるか！」

素良は、それこそ雷にでも打たれたのかのように走り出した。

地を滑り壁を蹴る。その身体能力は、おそらくコナミを凌駕するだろう。一朝一夕で得られるものではない。

アクションマジック

「A 魔法《ミラー・バリア》発動！ このターン自分のモンスター一体は、カード効果で破壊されない！」

「だがここで《真紅眼の鋼炎竜》、第二の効果が発動する！ 相手が魔法・罠・モンスター効果を発動させる度に、500ポイントのダメージを与える！」

「なに——?!」

ドーム状のバリアが《デストーイ・シザー・タイガー》を覆った直後、雷撃に追従して火炎が放たれた。

《ミラー・バリア》の対象は一体のみ。全てを防ぐことはできず、《デストーイ・シザー・ベア》は電撃に貫かれ、素良は炎に焼かれた。

素良

LP:1300 ↓ LP:800

「つ——全く、どうしてここまで手こずらせるかな……!」

素良は苛立ちを隠さず、コナミとドラゴンを睨みつける。

……《真紅眼の鋼炎竜》。一回で与えるダメージは僅か500。素良からすればこ

の上なく小賢しい能力だ。

だが、塵も積もれば山となる。いや、八回喰らえば負けるといふ時点で、塵と言うには少しばかり大きいだろう。

「《テストロイ》モンスターが減ったことで、シザー・タイガー、シザー・ウルフの攻撃力は下がる！」

《テストロイ・シザー・ウルフ》

攻4400 ↓ 攻4100

《テストロイ・シザー・タイガー》

攻2800 ↓ 攻2500

「バトルだ！ 行け、《真紅眼の鋼炎竜》！ 《テストロイ・シザー・タイガー》を攻

撃！ レッドアイズ・フレアマタル・ドラゴン「ダーク・テラ・フレア」！」

担い手の指示を受け、鋼竜は獄炎を吐き出す。周囲一帯に炎が叩きつけられ、《テストロイ・シザー・タイガー》は瞬く間に吞まれてしまった。

素良

LP:800 ↓ LP:500

「《テストロイ・シザー・タイガー》が破壊されたことで、シザー・ウルフの攻撃力はさらに下がる」

《《デストーイ・シザー・ウルフ》》

攻4100 ↓ 攻3500

「ターンエンド……さて。これで残りのライフは500。シザー・ウルフの攻撃力も3500に戻った。もう後がないぞ、素良」

「……後がない、だって？ 冗談言うなよ」

素良は伏せた顔を上げ、コナミを睨む。もはやそこには、デュエル開始時のような笑顔はない。

あるのは狩人の目。楽しむ余地などなく、ただ、目の前の首を狩る。それだけに固執した殺意の目だ。負けることなど有り得ない。そう言わんばかりに己の劣勢を否定する。

「コナミ、どうやら君の目は節穴みたいだね。確かに《《デストーイ・シザー・ウルフ》》の攻撃力は下がったさ。でもまだ3500もある。レッドアイズを倒すには十分だよ！」
 「だが、《《真紅眼の鋼炎竜》》がいる限り、お前はカード効果を一切使用できない」
 「だったらどうしたっていうのさ。僕のターン！」

このままバトル！ 行け、《《デストーイ・シザー・ウルフ》》！ レッドアイズ達を葬り去れ!!」

「《《真紅眼の鎧旋》》の効果発動！ 来い、《《真紅眼の黒竜》》！」

《レッドアイズ・ブラックドラゴン》
《真紅眼の黒竜》

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

「またそのカード……いい加減鬱陶しいよ」

「なら、攻撃を止めるか？」

「まさか。何度でも蘇生するなら、その度に蹴散らすまでだよ！

バトル続行！ 行け、シザー・ウルフ！」

コナミ

LP : 1900 ↓ LP : 1200

《デストーイ・シザー・ウルフ》の三回攻撃により、コナミのモンスターが再び全滅した。

破壊と蘇生。このデュエルはその繰り返しだ。素良が蹴散らし、コナミが復活させ、また素良が蹴散らす。

そして、それもここまで。鋼竜は消えた。ここからは蹂躪が始まる。

「魔法カード《マジック魔玩具融合デストーイ・フュージョン》を発動！ フィールド・墓地からモンスターを除外し、新たな《デストーイ》モンスターを融合召喚する！ 僕は墓地の《デストーイ・シザー・ベア》、《ファーニマル・マウス》二体を除外し、融合！

戦慄のケダモノよ！ 鋭い牙よ！ 神秘の渦で一つとなりて、新たな力と姿を見せよ

!

融合召喚！ 現れ出ちゃえ、全てに牙むく魔境の猛獣！ 《デストロイ・サーベル・タイガー》！

《デストロイ・サーベル・タイガー》

星8／闇属性／悪魔族／攻2400／守2000

虎のぬいぐるみの全身が引き裂かれ、剣と思しき刃物が骨組みを再構築する。シザー・タイガーとはまた違う、虎型の《デストロイ》だ。

「《デストロイ・サーベル・タイガー》の融合召喚に成功した時、墓地の《デストロイ》を一体特殊召喚できる！」

現れ出ちゃえ、《デストロイ・シザー・タイガー》！

《デストロイ・シザー・タイガー》

星6／闇属性／悪魔族／攻1900／守1200

「シザー・タイガー、サーベル・タイガーの相乗効果により、《デストロイ》達の攻撃力は合計1500アップする！」

《デストロイ・シザー・ウルフ》

攻3500 ↓ 攻5000

《デストロイ・サーベル・タイガー》

攻2400 ↓ 攻3900

《テストイ・シザー・タイガー》

攻1900 ↓ 攻3400

「……圧巻だな。流石は素良。これがお前の本気か」

「まるで他人事だね。ちゃんと状況分かっている？ この次が真正銘、君の最期のターンなんだけど？」

「ああ、悪いな。頭では分かっているが、まるで実感がない。どうやら転生者ってのは、俺が思っているよりずっと便利なものだったらしい。二人の人間の価値観を持つと、これまで見えなかったものが次々と見えてくるんだ」

「……絶体絶命だつていうのに饒舌だね。つまり、何が言いたいのさ」
「俺は絶対に負けないつてことだよ。」

素良の言うことは半分正解だ。確かに現世のボクなら諦めていただろう。だが、前世の俺は諦めていない。それどころか勝利を確信している。

——そんな目をしている連中に、転生者たる俺が負けるはずないとな」

絶対的な自信とともに、コナミは宣言した。

もしも素良に確たる覚悟、負けられない理由があつたのなら、コナミはきつと敗れるだろう。度を超えた力は、同じように超えられてこそ意味がある。転生者とは一つの試

練だ。『現在』^{イマ}を生きる者が『過去』に打ち克つ。そうして未来へと繋がっていく。

今の素良にその資格はない。遊び半分で可能性を狩り続けるその姿勢に、あるはずがない。資格がない以上、どうしたってコナミの敗北は有り得ない。

……転生者のデュエルは全て必然。

勝利も敗北も、何もかもを意のままに操る。

「行くぞで」

——気が付けば。

——小波^{コナミ}ユウは。

——変貌していた。

髪は逆立ち、瞳はさながら真紅^{モンスター}眼の如く——赤く、朱く、そして紅い。

立場が逆転する。

崇高な狩人は、懦弱な獲物へと成り下がり、

逃げ惑う草食動物は、全てを喰らう肉食動物となる。

「俺の、ターン!!」

カードを引く。それだけで紅い風圧が起こり、全てが震撼した。

「何が……起こってるの……?」

それは誰の眩きだったか。

いや、誰もが眩いただろう。

そんな動揺に目をくれず、コナミはデュエルを進める。

「《貪欲な壺》を発動。

墓地から《伝説の黒石》、

《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》

《真紅眼の黒竜》、

《真紅眼の黒炎竜》、

そして、《真紅眼の鋼炎竜》の五体をデッキに戻し、シャッフル。そして二枚ド

ロー。

……モンスターを裏守備表示で召喚」

「裏守備……?」

……なんだ、驚いて損したよ。やっぱり君は狩られる側だ。この状況を覆すことなんてできないよ！」

何かが起こる。そう確信しつつも、素良は虚勢を張る。

「慌てるな素良。お楽しみはこれからだ。

魔法カード《ミニマム・ガッツ》。自分のモンスターを一体リリースし、相手モンス

ターの攻撃力をターン終了時まで0にする。俺は、《デストーイ・シザー・ウルフ》を選

「

裏守備表示のモンスター——《黒鋼竜》がオーラを纏って突撃した。風穴が空き、牙は破壊され、目に見えて弱体化する。

《デストーイ・シザー・ウルフ》

攻5000 ↓ 攻0

「つ……攻撃力を0にしたところで、モンスターがいなければどうってこと——」

《黒鋼竜》の効果発動。このモンスターがフィールドから墓地に送られた時、デッキから《レッドアイズ》カードを一枚手札に加える。

俺が加えるのは……《真紅眼融合》

「……………え？」

素良の思考が停止した。コナミが加えたのは紛れもなく、モンスターを《融合》するカードだったのだ。

エクシーズと融合の両刀使い。珍しくはあるが、ありえない事ではない。だが、先ほどのドラゴン——《真紅眼の鋼炎竜》——を目の当たりにした素良にとっては信じられないことだった。

「俺は魔法カード、《真紅眼融合》を発動！ 手札・デッキ・フィールドから素材となるモンスターを墓地に送り、《レッドアイズ》を素材とするモンスターを融合召喚する！」

俺はデツキから《真紅眼の黒竜》、《デーモンの召喚》を墓地に送り、融合！

可能性の竜よ。雷光の悪魔よ。原初の渦で一つとなりて、新たな力をここに示せ！

融合召喚！ 現れる、《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》！

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》

星9／闇属性／ドラゴン族／攻3200／守2500

巨大な龍が炎を巻き上げ降臨した。

強靱な肉体と紅い眼光。他を圧倒する召喚エネルギーに、フィールドは荒れ狂う。

広いはずなのに狭い。コナミを除く四人はそんな印象を抱いた。単純にサイズが巨大なだけではない。その威圧感はずかしく本能を刺激し、恐怖という名のアラートをこれでもかと鳴らしている。

——破壊。この龍はその一点においてのみ特化している。守りなど知ったことではない。それは決闘者^{マスター}の仕事だ。この龍は、ただ目の前の標的を灼き尽くし、そして蹂躞する。

新たなドラゴン、それも融合モンスター^{マスター}の出現に、素良は困惑した。

エクシーズと同等、あるいはそれ以上の力の奔流。どちらも紛れもなく本物故の力だった。

本来ならどちらか一つ。片方が本物なら、もう片方はどれだけ磨いても継ぎ接ぎ、

フエイクの域を出ないはずなのだ。

——だが刮目して見よ。

立ちほだかるは本物の壁。

それはある種の到達点であり——同時に、限界でもあった。

「つ……考えるのは後だ。それより今は——！」

恐怖を振り切り、素良はA アクション カードを探し始めた。

彼の疑問は尽きない。ただ一つだけ分かるのは、このままだと負けるということ。心の奥深くに刻み込まれた決闘者^{デュエリスト}としての本能が素良を突き動かした。

コナミはそれを待たず、悪魔竜に攻撃を命令する。

「バトル！ 《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》、《テストイー・シザー・ウルフ》を攻撃！ 《ダーク・メテオ・フレア》！」

龍の顎が開き、火炎が放たれる。

否、それは『火炎』の域を超えていた。触れるもの全てを滅却する大砲か。

着弾する直前、素良はカードを拾って発動させた。

「A アクションマジック 魔法《回避》！ モンスターを攻撃を一度だけ無効に——なにつ!？」

しかしA アクション カードは、効果が適用される前に燃え尽きた。

抵抗は許さない。そう言わんばかりに。

「《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》が戦闘を行う時、相手はダメージステップ終了時までカード効果を発動できない」

「そんな——っ！」

《デストーイ・シザー・ウルフ》に煉獄が叩きつけられ、その一切が灰塵と化した。勢いはモンスターだけに留まらず、プレイヤーをも焼き尽くす。

「うわああ——!!」

素良

LP：500 ↓ LP：0

……デュエルが決着し、アクシオン・フィールドが消えていく。

最後に残ったのは倒れ伏す敗者と……己の力に戸惑う勝者のみだった。



「社長」

スーツの男——中島が呼びかけた。

社長。そう呼ばれた人物は窓越しに街を眺めている。

「分かっている」

そう一言。短くとも簡潔な答え。それで意思は伝わる。

「私の端末でも確認できた。これほどの召喚エネルギー、間違いなく奴等だろう。それで、場所は特定できたか？」

「はい。以前、社長も伺ったデュエル塾です」

「……何？」

社長と呼ばれた人物——赤馬零児は、ようやく中島の方へ振り返る。

「それはつまり、遊勝塾か？」

「おそらくは。誰の反応かは、まだ特定できていませんが」

「どういうことだ？ 私の端末が正しければ、先程のは融合とエクシーズの反応だった
が」

「はい。仰る通り、感知された反応はその二つでした。ペンデュラムが一切感知されていない以上、少なくとも榊遊矢のものではないでしょう」

「そうか。他の遊勝塾のメンバーは……」

「これです」

中島は懐から端末を取り出し、画面を投影する。

映っているのは遊勝塾の名簿。人数は塾長・塾生を含めて八人。小規模と言わざるを得ない小さな塾だ。

「……柊柚子。小波ユウ。紫雲院素良。怪しいのはこの三人か。融合エネルギーは紫雲院素良によるものだろうが、エクシーズの出処が読めないな。残り二人の戦績はどうなっている?」

「これまで一度もエクシーズを使用した経歴はありません」

「となると、どちらか二人が覚醒したか……それとも、奴等が現れたか」

「至急、街の警備を増員させます。今後、奴等が本格的に動き出すかもしれません」

「いや、まだ確証がない。下手に動いては刺激するだけだ」

「ですが社長、感知された融合エネルギーは二つです」

「なに……?」

エネルギーが二つ。その事実には零児は衝撃を受けた。

これまで何度か巨大な融合エネルギーは感知されていた。だが、それらは常に一つだったのだ。

「これは、紫雲院素良の仲間が遊勝塾に紛れ込んだことを意味しています。様子見の時期はもう過ぎたかと」

「……いや、まだだ。下手に接触して刺激を与えるわけにはいかない。今の我々は力不足だ。だからこそ慎重に行動しなければならぬ」

「! まだ、続けるつもりですか?」

「ああ。おそらく、紫雲院素良自身は我々に敵意を持っていない。遊勝塾に馴染んでい
るのがその証拠だ。ならば現状維持こそが最善。」

……問題は他にある。今連中を呼ばれてしまえば、この舞網市は容易に滅ぶだろう。
それに、どちらかが覚醒した可能性もゼロではない。ちなみに、その二人の勝率はどう
なっている?」

中島は端末を操作し、柊柚子、小波ユウの戦績を確認した。

勝率は決していい方ではない……が、なんとか一定数の勝ち星を上げていた。

「……どちらも、条件は満たしています」

「ならば私から言うことは二つ。」

監視を怠るな。何かあったらすぐに知らせろ。

……この反応が敵か味方か、早急に見極める必要がある」

